

新琵琶湖博物館創造ビジョン(ビジョン案概要)

湖をめぐる博物館の「森」構想
～博物館の「木」から地域の「森」へ～

使命と基本理念、めざすもの

■使命(平成8年度～)

琵琶湖博物館は、研究・調査に基礎をおきながら交流・サービス、情報の収集・発信、資料整備、展示を総合的に行うことにより、琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしについての理解を深め、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いていく。

■基本理念(平成8年度～)

テーマをもった博物館
「湖と人間」というテーマにそって、未知の世界を研究し、成長・発展する博物館

フィールドへの誘いとなる博物館
魅力ある地域への入り口として、フィールドへの誘いの場となる博物館

交流の場としての博物館
多くの人びとによる幅広い利活用と交流を大切にする博物館

■中長期目標(平成14年度～)

「地域だれでも・どこでも博物館」の実現

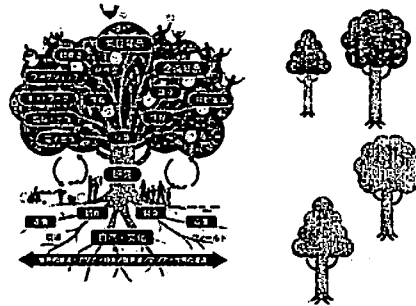
使命・基本理念・中長期目標を承継し、これからの時代に求め、社会の要請を踏まえ、「湖と人間」の新しい共存のあり方を提示するため、展示交流空間を再構築する。

琵琶湖・淀川流域から「湖と人間」を考える
地域の人びとの誇りとなる博物館

環境先進地域「関西」をリードする環境学習と情報の収集・発信の拠点
地域に根ざしながら広く世界を視野に入れた研究・交流のネットワーク施設

～博物館の「木」から地域の「森」へ～

【琵琶湖博物館の活動イメージ】



<今の琵琶湖博物館>

成木になった琵琶湖博物館

研究・調査や交流活動などにより、多くの成果を生み出してきた一方で、展示構造が固定的なため、それらの成果を活かしきれていない課題に直面している。
より魅力的な交流プログラムなどの開発も含め、時代に即した情報受発信力の強化を求められている。

<リニューアルでめざす新琵琶湖博物館>

親木となる琵琶湖博物館

展示交流空間の再構築を通じて、タイムリーでわかりやすい情報受発信の機能を高め、より多くの人びとに琵琶湖博物館を利用してもらう。
地域の人びと一人ひとりの心に「種子、押し木、幼木」を渡していく博物館をめざす。

<将来的な地域の姿>

湖をめぐる博物館の「森」の誕生

琵琶湖とその集水域および淀川流域の自然、歴史、暮らしへの理解が深まり、地域の人びととともに「湖と人間」の新しい共存関係を築いた社会の実現。

期待される効果

- (1) 過去から学び、現在を見直し、未来を新たな視点で考える深みのある理解の促進
- (2) 地域の問題を自分のこととして理解し、琵琶湖の大切さに気づき、誇りに思ふ人びとの増加
- (3) 博物館の利用が促進されることで、新たな交流が広がり、地域から魅力的な発見と創造が生まれる
- (4) 博物館の利用者(リピーターや新規利用者)が増加し、暮らしの中に博物館が定着
- (5) 関西の命の水を預かる滋賀県からの発信力が強化、内外から琵琶湖地域の知名度が向上



滋賀県立
琵琶湖博物館

LAKE BIWA MUSEUM

琵琶湖博物館の実績と現状

(1) 経緯と評価/来館者数

「湖と人間」をテーマに平成8年に開館
 来館者数800万人を達成(平成24年8月)
 観察会(体験教室)開催を年間200回以上開催
 博物館の事業・研究に地域の人びとがかかわる「まじかけ」(観覧者数356名)や「フィールドレポーター」(観覧者数90名)制度を全国
 先駆けて構築
 資料を累計85万点収集、45万点を整理登録、資料データベース17分
 野、電子図鑑8分野を公開
 活動の深まりと広がり、対外的な評価を得る一方、平成12年に50万
 人だった年間来館者数が、平成23年には37万人に減少
 未就学児～小学生の来館者数はほとんど変わらないが、大人の来館
 者数が減少

(2) 社会情勢の変化

少子高齢化の進展、高度成長から生活の
 質を重視する成熟の時代へ
 環境に対する考え方や価値観の多様化
 生物多様性や持続可能社会などの新たな
 環境観が社会的に広まる
 外来生物の移入や鳥獣害、琵琶湖深層部
 の低酸素化など新たな環境課題の顕在化
 地球温暖化対策としての低炭素社会の実
 現などの新たな社会的な動きが活発化
 府県域にとどまらない自然共生型社会つ
 くりなど広域的な環境保全の要請

2) リニューアルに向けた考え方

(1) 対応が求められるターゲット層と利用者数の向上に向けた取り組み

- ①大人の潜在利用者層: 魅力を伝える情報発信力の強化、大人が一人でも利用したいと感じ、楽しめる展示・レファレンス機能
- ②親子利用者層: 親子で楽しめる展示やイベント、大人になっても利用したいと思わせる展示・体験空間の提供
- ③観光客: 観光客が興味を抱く展示・イベント、季節ごとに楽しめる屋外体験の充実、周辺観光スポットとの連携

(2) リニューアルに向けた考え方

- ・研究・調査の成果を常設展示で発信
- ・より魅力あるプログラムの開発と提供
- ・多くの人が博物館と多様な形で関わり能力を発揮する場
- ・アミューズメント機能の強化、交流施設の充実
- ・ICT(情報通信技術)活用やレファレンス機能の充実
- ・情報発信機能、刊行物の強化
- ・収録されている膨大な資料・標本を展示に活用
- ・随時更新可能な可変性の高い展示空間へ

3 リニューアルのあらまし

(1) 「湖と人間」の展示交流空間の再構築～新たなコンセプト

「湖と人間」の展示交流空間の再構築～新たなコンセプト

「湖と人間」の展示交流空間の再構築～新たなコンセプト

(2) 常設展示の再構築

常設展示再構築の方向性: 現在の展示の良さを生かしつつ、常設展示の発信力を強化する。

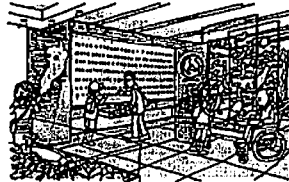
実物資料(標本)を活かした感動をよぶ展示
 展示更新が随時行われ、来た日々に新鮮で新しい発見のある展示
 子どもたちにとってわかりやすく、親しい、参加型の展示
 自分たちの日常とのかかわりが伝わる展示

暮らしと自然にかかわる価値観の変化や新たな環境課題
 に対して、最新の研究成果や考え方を提示する学びの展示
 地域の人びとが最新の研究成果や収集資料を紹介する市民
 づくりの展示

【A展示室:琵琶湖と生き物のおいたち】

現在までの数百万～数万年という長い時間スケールによって理解できる
 環境の変化とそれに関連した生き物の進化と絶滅など、現在の琵琶湖や
 その環境、生き物があるバックグラウンドを知る空間。

【展示室イメージ】



【B展示室:身近な自然と人びとの暮らしの歴史】

人が定住をするようになってから現在までの1万年数千の時間スケールに
 よって理解できる自然のリズムや変遷の中での、人びとの暮らしや自然観、
 生き物観を紹介する。

【C展示室:近年の環境と人の活動】

近年に起きた自然環境や人の暮らしの変化といった数十年の時間スケールによって理解できる事象や
 現在の琵琶湖地域の事柄について、分野を横断して多様な視点で紹介する。
 学芸職員による最新の研究成果を定期的に更新しながら紹介する展示により、常に新しい話題を提供。

【水族展示】

近年の環境について生き物を中心に示す展示。琵琶湖とその周辺の淡水水域を中心とした生き物を主役とし、
 その生態、生物間や人の暮らし、特に漁業などとの関係性を紹介する。

(3) 交流空間の再構築

交流空間再構築の方向性: 参加と発見、対話と交流を促す交流空間を構築する。

博物館の楽しさが伝わり、知的好奇心を育む、新たな活動の場となる交流空間
 博物館周辺の琵琶湖やヨシ帯とつがる自然を体感する屋外交流空間
 博物館の魅力を増すアミューズメント機能の強化



参考: オーストラリア博物館

【大人のディスカバリールーム(仮称)の新設】

資料・標本や複製、図鑑を備え、来館者が自由に触れ、調べ、観察
 できる大人の興味や探究心に応えるコレクションルーム。博物館ス
 タッフや地域の人びとの活動を見学し、交流もできる学習交流空間。

【ICT(情報通信技術)を活用した交流空間】

快適でスピーディな学びや情報受発信・交流の推進。

【体験型交流空間】

昔の道具の使用体験、サイエンスカフェやミニ講座など、過去を理解し、
 新しいことを発見する学びの場の充実や交流を育む空間。

【屋外交流空間】

周辺の琵琶湖やヨシ帯とつがる自然を体感し、過去の里山
 や農村の暮らしなどが体験できる屋外交流空間。

【レストラン等アミューズメント機能】

地元の食材や特産品を楽しめるレストラン、楽しいミュージア
 ムショップなど、魅力的で博物館の価値を高めるアミューズ
 メント機能の充実。

(4) 交流機能の強化

だれにとっても居心地が良く、開かれたわかりやすい交流活動の推進
 と情報受発信の強化により、多様なつながりを広げていく。

【博物館活動の交流基盤機能の強化】

博物館活動の窓口機能の統合、情報受発信力の強化、さまざまな主体との連携構築。

【学校等との連携】

自主的な問題発見と学びを応援、博物館と学校をつなぐ人材の育成、
 高校・大学等との連携強化、学校と地域で活動している人をつなぐ。

【利用者参加制度】

はまなグループやフィールドレポーター等利用者制度のさらなる充実、新たな
 協力者制度。

【国際協力機能】

国際湖沼環境委員会(ILEC)との連携強化、資料・情報収集、研究、交流、展示の
 国際化、地域と海外の人的交流の促進。

(5) 利用者の立場に立った施設整備・運営の確保

【情報をよりわかりやすく、
 より多くの人びとに発信】

【ユニバーサルデザインの推進】

【安全で効率的な施設・設備の整備】

【サービス向上に向けた付帯設備・
 空間等の整備・拡充】

【互いに有益となる外部資金導入、
 企業連携等】